

決別

私が一世一代の覚悟で臨んだ映画「雪国」のロケ撮影の初日である。雪の連山に囲まれて私を負った島村役の池部良さんが素足にげた履きで凍えた雪解け水の川に入る。

私の履歴書

子 恵 岸

⑮

セリフもないし、川を渡るだけのカットが何回やつても豊田四郎監督は気に入らなかつた。駒子役の私の負ぶさり方が「芸者になっていない」とそっぽを向く。心がささくれ立ち、雪解け水より凍えてきた頃、「やっと芸者らしくなった。でも新橋の芸者だ。」

温泉芸者になっていない」

そんな撮影が1週間も続いたある日、酔った駒子がしどけなく島村に甘えるシーンを何回もテストした後、豊田監督が言い放った。

「お二階さん、照明消して早飯にしよう。岸クンに駒子をじっくり考えてもらおう」

「早飯にしないで、もう一度やらせてください」

初日以来、物も喉に通らず、

がぐらっと揺れたように思っ

た。瞳の奥に漂う深い優しさに私の駒子が碎け散り、豊田監督の駒子が肌を忍び込んできた。白けたスタッフの気の毒そうに見守る中、本番が回った。私はそれまでとは違っ

た。駒子になっていた。

「いいじゃないの、お駒さん。とっても良かったよ」

豊田監督がくしゃくしゃの笑顔で手までたたいて喜び、

「パリへ」シアンピに電報

駒子演じ切った朝 涙止まらず

やつれ果てた私が叫んだ。すると池部さんが寄ってきて内緒事のようにささやいた。

「すき焼き、好きかい？」

「えっ、何がすき焼き？」

奈落の底に落ちるかもしれないこの瞬間に……

第一、私はその頃、すき焼きが大嫌いだっ

た。「今夜、みんなですき焼きを食おう」

池部さんの目を見て、何か

「卵を割らなければオムレツは作れない」

オムレツは食べた いけれど卵を割りたくないという未練がましきは私にはなかった。

「雪国」出演が決まった時、私は自分の卵を割った。

1957年5月1日にパリのあなたの元に行きます――

で自分が弾く」。そして6カ月間、指先に血豆ができるほど夢中になって稽古し、大薩摩を立派に弾き終えた。

女優としての私への決別の楔だった。私は駒子に恋し、池部さんが演じる島村に恋し、監督やスタッフに恋した。

最後のワンカットを撮り終えたのは徹夜明けの朝方。結髪室で自毛で結いあげた日本髪

の元結にハサミが入り、プツンと音がした。私の24年間への決別の音だっ



「雪国」で池部良さんと映画演劇文化協会提供

イヴ・シアンピに電報を打

った。結婚の決意を両親とにんじんくらぶの若槻繁代表にだけ打ち明けた。3人とも青ざめた笑顔で目を潤ませた。それから必死で三味線の稽古をした。生まれて初めて持つ三味線に誓った。「駒子が弾く大薩摩を吹き替えなした。」

(女優)